農山村集落との交流型定住による故郷（ふるさと）づくり

岡　絵理子

関西大学環境都市工学部建築学科の岡と申します。よろしくお願いいたします。今回は、神戸大学と関西大学の交流の場だとお聞きしておりますけれども、関西大学の中でも、人文系の方々と我々工学系の者が交流するという機会はなかなかございませんで、呼んでいただけたことをたいへん光栄に思っております。

それでは、簡単ではございますけれども、農山村集落との交流型定住による故郷づくりについてご紹介させていただきます。これが、私どもがフィールドにしております丹波市の佐治（さじ）という町です。神戸大学の方で行かれた方はいらっしゃいますでしょうか。今ご覧いただいておりますのは、佐治の町にある岩屋山（いわややま）という山の山頂から見た景色です（**図 1**）。上昇気流が上がってくるところですので、パラグライダーができます。パラグライダーの出発地点からこういう景色が見られます。ここまで実は足を使わずに車で上がれるという、とても便利なところです。

図 1

これが丹波の景色です（**図 2**）。山のあったところが一度沈んで、そして堆積をしてまた隆起したというようなところです。田んぼが広がって、山際のところに集落があって、それでもうすぐに山が始まるという、それも丸くかわいらしい山が並んでいるというふうなところです。赤く見えますのが、パラグライダーがおりてきたところです。田んぼにしましてもこういう景色です（**図 3**）。去年の冬は雪が多かったので、こういう景色になります。

図 2

図 3

これが丹波市です（**図 4**）。丹波市の一番北側で、すぐ近くが福知山や豊岡です。この青垣（あおがき）というところに佐治という町があります。青垣の中でも佐治は、もともと古くて中心的な市街地で、「町」と呼ばれるところです。また、佐治は交通の結節点であり、宿場町でもありましたので、例えば大石内蔵助（おおいしくらのすけ）の奥さんの大石りくが、豊岡に里帰りをするときに必ず佐治の町で泊まっていまして、「その旅館がうちの家や」という話も出てきます。

ただ、これを見ていただけたらわかるかと思いますが、赤い点線で書いているのは道路でして、

鉄道が来ていないんです。ですから、私たちが鉄道を使って行こうと思いますと、柏原(かいばら)までは行き、そこから路線バスに乗ります。私どものスタジオの前は「関西大学スタジオ前」というバス停になっておりますが、朝から大学を出ると昼３時ぐらいに着くという感じです。

図 4

丹波市は山に囲まれていまして、恐竜で近頃有名になっています山南(さんなん)町や市島(いちじま)、春日(かすが)というところは、谷筋のところの平地部にあります。佐治は農山村集落ではなくて、あくまでも町家が並ぶ町です。私どもの活動拠点関西大学佐治スタジオは、ちょっとはずれのほうで、新町(しんまち)と呼ばれるところにあります。真ん中あたりにもともとは役場などがありまして、そこが本町(ほんまち)になります。

図 5

これは、大正時代の写真です(**図 5**)。昭和 40 年ぐらいまでは人通りが多くて、40 歳代の方でも、「佐治の町に行くときには、ちょっといい服着ていかないかん」と言っておられたくらいです。映画館もありましたし、にぎわっていたところです。それが今はこんな感じでだれもいません(**図 6**)。ここにいろんな人たちが歩くようになればいいなと思うんです。ところが調べますと、例えば、歩車分離がされていないので安全ではないということで、この道は小学校の通学路に指定できないわけです。この古い通りを子供たちが歩けないというふうになっています。いろいろ調べてみると、とんでもないことがわかってきます。

図 6

これは、「妻入(つまいり)」といいます(**図 7**)。京都は「平入(ひらいり)」といって平側に出入口があるんですが、このように妻側から家に入っていきます。篠山でもこの妻入なんですが、この理由については、雪がお客さんのほうに落ちないようにという配慮だと聞いていますが、事の真相はよくわかりません。

図 7

さて、関西大学の私どもの研究室が佐治に関わるようになりました経緯というのが、2006 年に日本建築学会 120 周年を記念した近畿支部主催の設計競技です。そのときに関大チームが丹波市長賞をいただきました。その提案がこの現代ＧＰの提案そのもので、学生が考えた提案に教員も大学もまきこまれてやっているという状態になっています。そのときに、実は神戸大学の建築の先生方も頑張ってくださり、学生さんもたくさん応募

していただいたのですが、たまたま賞をもらえなかったのでここにおられないということで、私どもはこの賞をいただけたので佐治にいるということです。この丹波市長賞をいただいた時、「本当にやるんですか」と皆さんに聞かれましたところ、学生が、「はい、やります」と言ったんです。それで、「そのまま放っておくわけにはいかないな」ということで、私どもの研究室で活動を開始しました。といいますのは、やはり設計競技のこの調査のために何度か佐治へ行った学生たちが、「また行きたい」と言うんです。「じゃあ、何か企画つくってやろうか」ということで、大学にお願いをして、2007 年６月には何とか町家を一軒お借りすることができました。このときは、まだ現代ＧＰの活動ではありませんでしたので、交通費がありませんでした。実は、交通費捻出のために現代ＧＰに申し込みました。現代ＧＰが地域型のプログラムでしたので、それに応募するためには丹波市との協定がどうしても必要だということで、2007 年７月に、慌てて連携協定を結びました。それで、2007 年 10 月には現代ＧＰプログラムに採択されまして、交通費をゲットしました。

佐治スタジオは、古い町家でして、2007 年から改修工事を始めまして、今はもうでき上がっています。2009 年１月には、二軒目の町家を借りまして、今そちらの改修工事が始まっています。

これが、ちょっと見にくいんですが、「思いの束」という学生の提案です(**図 8**)。丹波市は定住政策というのをとっていますけれども、突然行って定住するというのはあり得ないので、とりあえず学生が何回も行っているうちに、「いつの間にか自分たちのふるさとのような気分になるんじゃないか」「そしたらまた行きたくなって、そのうちに、１人ぐらいは住むというかもしれない」というようなプログラムです。

図 8

これが、私どもが借りていますスタジオで撮った写真です(**図 9**)。連携協定を結んだ日には、ここで河田悌一学長（当時）と丹波市の辻重五郎市長が握手をしておられました。この写真は道のほうから見ています。これが町家のすばらしいところで、扉を全部はずしますと、このように美しい庭が、道のほうから筒抜けという感じで、こういうすばらしい舞台ができ上がりました。

図 9

「関わり続けるという定住のカタチ」が私たちのキャッチフレーズです。関西大学の学生は、今本当にふるさとがないんです。というのは、学生のおじいちゃん、おばあちゃんが戦後の高度経済成長期に九州や四国からやってきたということなので、両親の世代にはふるさとがあるのですが、今の学生たちにとっては、親戚はいるけれども遊びに行くところとは違う、あるいはもうだれも住んでいないところというようになっています。そういう学生たちにふるさとをつくろうというのが、私たちの考えです。

時間をかけて地域とかかわる中から見えてくる、地域の抱える課題や魅力を顕在化させていくということと、交流や理論を重ねながら地域再生を考えていくという２つが主な活動です。実際にやっていることは、空き家リノベーション、滞在型交流ワークキャンプ、現地交流ワークショップ、研究室による研究活動、公開講座、それから地域再生という授業もやっています。

まずは、「空き家リノベーション」。1970 年代には農村の生活改善運動が随分盛んになりまして、改修工事がなされました。例えば、「土間で台所仕事をするなんて女性差別だ」ということで、床が張られたのですが、材料がこのようなテ

カテカの新建材で(**図 10**)、豪華には見えるんですけれども、剥いでしまうと、本当に皮一枚という感じでした。そして、どんどんはいでいきますと、向こう側は柱みたいなものはありますが、トタンの波板 1 枚で断熱材も何も入ってなくて、全くの張りぼてだったということがわかりました(**図 11**)。この状況の中で、「じゃあ、どうしよう」ということで、学生たちが考えたわけです。ありがたいことに、私どものところには、建築家でたくさんの住宅も建てておられる江川直樹(えがわなおき)先生がいますので、アドバイスをいただきました。

図 10

図 11

これは、神戸の震災でつぶれたバーのカウンターをいただいてきたというものです（**図 12**)。それ以外は全部地元の杉で作りました。床のほうは、土間にするということも考えたんですが、少し寒いということで、厚さ 45 センチの板を敷いて「板土間」をつくりました。

夜になるとこんな感じです (**図 13**)。町家って、店をやっていると明るいんですけれども、今は店の間の土間が駐車場になっていて、その奥にある座敷で暮らしておられるので、生活されていても外に光がほとんど漏れないんです。このプロジェクトでは、空き家を改修してきれいにするということはもちろんですけれども、学生が来たことが町の人たちにわかるというのが一番のコンセプトで、学生がたまる場所をできるだけ道に近いところにつくって、光が外に漏れるような家のつくり方をしています。さらに、構造的にも補強しました。古い木造の家というのは、民家ですので強いのですが、改築していますので、長年持っていますけれども、今の耐震基準には合っていません。床を張り直したりして、スラブで構造的に補強するというようなこともしていますし、天井に薄い杉板を張り付けてきました。また、地元の大工さんに来ていただいて、技術は教えてもらうんですが、逆に我々が「こういうふうに改修する方法があるよ」ということを地元の大工さんに教えるということもあります。

図 12

これが、今取りかかっている本町のゲストハウスです(**図 14**)。ここはもともと自転車屋さんで、お借りしましたら、どういうわけだか「裏の畑も一緒に借りてくれ」と言われまして、畑も借りております。またなにわ野菜の栽培にお使いいただけたらと思います。また、「こういう改修工事をするんだ」ということを地元の方々にお知らせし、さらに地元の方々の意見も聞いていこうという形をとっています。

「滞在型交流ワークキャンプ」というのがあります。これはインターシップで、学生が 5 日間滞在して、いろんな地元の産業を体験するというものです。田んぼの広がる風景を学生に見せますと、「地元では農業が盛んなのだ」と勘違いをするのですが、実はあの農地のほとんどが私たちがお世話になった「まるきん農林」という農業会社

がやっておりまして、耕作する人がいなくなった田んぼを一手に引き受けています。学生たちが地域の実態を学びながら体験をするということです（**図 15**）。

図 13

図 14

図 15

これは、町家改修の際に杉板をたくさん出していただいた製材所での体験です（**図 16**）。森林組合でも体験をしました。森林組合の体験の応募をしたら、どういうわけだか女の子ばかりが来ました。指導者の方は喜んでられましたが…。

また、市島は酒づくりが盛んで、そこの山名（やまな）酒造にも行きました。ここには、男子学生が行ったんですけれども、酒づくりの基本は風呂に入ることと言われたそうです。変な菌がお酒に入ったらいけないので、毎日風呂に入っておいしいものを食べていたようです（**図 17**）。

図 16

市島には、古民家を利用した「シルバーハウスいちじま」というデイサービスセンターがありまして、そこにも学生が行きました。めったに若い男の学生が来ることがないので、特におばあさんは喜んでしまって、学生の手を離さないというようなことも起こりましたし、デイケアをやっておられる女性の方も、若い男の子と話せる機会がなかなかなかったようで大いに喜んでいただけたようです（**図 18**）。

図 17

図 18

また、学生たちは、時間の合間に、川の滝つぼに飛び込むという遊びをやっていましたが、地元

の子供たちは、こういう自然の遊びを全くやらなくなっています。初めて行ったときに、小学生の子供たちの親御さんに話をうかがったのですが、「ここの町の子たちは遊ぶ場所がなくてかわいそうや」「公園がなくてかわいそう」と言われるんです。そこで「公園なんか何でいるの」「こうやって遊ぼうよ」と言って、学生たちと一緒になって遊んでいました。

「「地域再生」現地滞在型講座」という授業を関西大学で授業として認めていただきまして、これがその成果です(**図 19**)。２泊３日で佐治の町を24 時間感じ取ろうということです。２泊３日すると、朝、日が出て沈むところまでわかります。お渡ししました「成松の住まいと暮らし」は、その成果報告書です。成松の町家ではどんな住まい方をしてどんな暮らしをしているのかというのを、学生たちがヒアリング調査をしました。

図 19

図 20

ここに写っているのは、江川先生の授業で、２泊３日貫徹をして設計をしようというもので、学生たちは、何か目もうつろになっていますが、佐治の町に合う住宅を設計をしようというものです(**図 20**)。スタジオの２階は、壁を全部取っ払いまして、こうやって学生たちがごろごろできる場所をつくっております。

図 21

それとはまた別に、「公開講座」では、「丹波を知る」「地域再生」という２つの講義を１ヶ月に１度やっております。「丹波を知る」では、「シルバーハウスいちじま」の森田順子(もりたじゅんこ)所長や、丹波竜を掘った足立洌(あだちきよし)さん(考古学研究家)といった、実にさまざまな方に来ていただきお話していただいています。最近では、２月 21 日に、辻市長にも来ていただき、丹波について語っていただきました。「地域再生」では、山形県金山町産業課商工景観交流係長の須賀稔(すがみのる)さんや、それぞれの地域で活躍されている研究者の方々に来ていただきました。これは、景観における先駆者でいらっしゃいます樋口明彦(ひぐちあきひこ)先生（九州大学准教授）にお話いただいているところです(**図 21**)。これにつきましては、内容がほぼすべてホームページにアップされていますので、見ていただけたらと思います。

図 22

次に「地域交流ワークショップ」です。学生と住民とでイベントを企画・立案し、交流を深めるということをしております。実は私どもの研究室で、カンボジアのトンレサップ湖の浸水域の集落調査をもう 4 年ほどやっていまして、この写真はその集落の長さと佐治の町の長さがちょうど同じくらいだということを皆さんに紹介しているところです(**図 22**)。秋祭りや収穫祭といったものにも参加しています。特に私たちのように都市計画や建築を研究している者にとっても、祭りはとても興味深いものでして、地域のコミュニティーを知るうえでも大切な手がかりになります。学生たちは、自分の地域には、伝統的な祭りがなかったり、あっても参加したことがありません。「こんなに簡単に地域の祭りに参加できるなんてうれしい」と言っていました。これは裸祭りなんですが、この写真の中にきっと学生が混じって裸で参加しているはずです(**図 23**)。また、佐治には「八宿祭」といって、地域のおいしいものをいっぱい出すお祭りがあるんですけれども、そこに関西大学のブースを一つ設けまして、関西大学のグッズを売ったり、活動の発表をしたりしています。

図 23

これはマップづくりをしているところです(**図 24**)。今地元の若い女性にこの佐治のスタジオのスタッフをしてもらっていますが、学校帰りの小学生や中学生がよく遊びに来るんです。ここでたまって帰っていくというようなことがこのごろ起こっています。その子たちをつかまえて町歩きをさせたりしています。

これはパラグライダーからみた佐治の景色です(**図 25**)。佐治スタジオと一言言っていただくと関西大学価格でちょっとお安くなると思いますので、皆さんもよろしかったら空の旅を楽しんでください。

図 24

図 25

町並みや暮らしの調査も丹波市からの受託研究でやらせていただいています。他にも、花火をしたり、アマゴを焼いたり、秋になったら紅葉を見に行ったりと、地元ではいろんな親睦会もやっています。とにかく、学生が朝から晩までを体験しようというのが一つの目的ですので、決して焦らずに時間をかけて続けていこうと考えています。

岡　絵理子（おか　えりこ）

関西大学環境都市工学部准教授。専門は建築環境デザイン。主な著書に『既成市街地の再構築と都市計画』（共著、1999 年）、論考に「屋外活動からみた中国的生活様式と住宅地の研究」（『ランドスケープ研究』67-5、2004 年）、「大阪市都心の居住地における居住者の環境認識に関する研究」（『日本建築学会計画系論文集』599、2006 年）などがある。